



# 双塔

カトリック新潟教会

2015年6月

No. 325

## 祈りに答える主の聖心に

助任司祭 ナジ・エデルベルトゥス

ある本で夏越し祭の絵を見て、2年前の経験をふと懐かしく思い出しました。ある友達に誘われて鶴岡の羽黒山に登って山伏の6月30日行われることになっている夏越しの祭に飾られる茅(ち)の輪(わ)を見ました。もう半年神に生かされて来ましたと言う感謝の心を示すと同時に、無事に続けられるように妨げになるものを除くように願いを込めて行われる祭りだそうです。どうして行うのか、何を信じて来たかを教えてもらって、お陰で自分も信仰年の間の話を思い出しました。

さて、6月になると太陽はますます北の方に進んで、6月21日には一番北にあるので昼が一番長くなり、日差しが強いと言われますが、日本は梅雨の真ただ中にあるので、雨の日になると日差しの強さを感じないかもしれません。さらに6月の緑は綺麗で薫る風を齎すので夏とはまだ感じていませんね。照りつける太陽が強くなるにつれて多くの葉っぱは段々大人の緑の葉っぱに変化していきます。羽黒山のような所の6月はそよ風を感じられる月で、山の風景に魅了されて、ご変容の山から下りたくないペトロのような気持ちを体験する人がいるかもしれません。そういった所に短く黙想をしていけばと思います。

長い間「ガリラヤの風かおる丘で人々に話された、力の御言葉をわたしにも聞かせてください」などの歌を歌う時にその意味が気になり、誰かにその意味を聞こうとしましたが、最近6月の話を聞いてから言葉の意味や歌を作る人の気持ち、そして聖書の箇所を思い出すことが出来て感謝の気持ちで6月を迎えながら、神の御言葉により親しむことに決心しました。イエス様のことをよりよく知る恵みを頂いて、誰かに聞かれる時に上手く答えることが出来るように準備することはキリスト信者の務めでありペトロによる勧めです(1ペトロ3・15)。

人と出会うチャンスが無くても、イエス様の聖心が全ての人々の心に生きるように恵みを祈る勧めがあります。それを使徒的的使命として毎日大切に、祈り続ける信者が沢山います。6月12日「イエスの聖心の祭日」のミサに参加できない年配の方々もその意向で祈れば、真の葡萄の木であるイエス様との繋がりができ、よい実を結ぶことになり続けます。流れのほとりの木のように、神に従う人は実をむすぶという詩編(1・3)があるように、祈りによってイエス様との繋がりを大切にしていけばと思います。

今月の日本の教会の祈りの意向に沿って困難の中にある家族をはじめ、難民や召命のために、いくつしみ深く祈りにこたえる主イエスによって祈ることを忘れないようにしましょう。



## そよかせ便り



### ■ 大瀧浩一神父様 司祭叙階 25 周年（記念ミサ・祝賀会）

----- 5月2日（土）11：00 -----

会場の新潟グランドホテルに、県内各地に加え名古屋、東京などから約 300 名が集まり、大瀧神父様（新潟教区本部事務局長・元新潟教会主任司祭）叙階 25 周年のミサと祝賀会が行われた。ミサは菊地司教様と 30 名を越す司祭団の共同司式によって捧げられた。司教様は説教を「司祭の役務は福音の喜びを証して生きることである」と始められ、「司祭として生きるべき姿を改めて心に刻み、次の 25 年に挑んでもらいたい」と大瀧神父様にエールを贈られた。そして「福音は人生に自由をもたらし、人生を変え、さらに美しいものにする」と教皇様のメッセージの一部を紹介して結ばれた。

祝賀会は、会場を 3F の階下に移して行われ、マリオ神父様のユーモアいっぱいのお話につき、青山、新庄教会などがコーラスを披露。各教会から霊的花束、新潟教会から記念品の紳士服の目録が贈られた。最後に大瀧神父様が「触媒としての司祭でありたい」と挨拶。笑顔と大きな拍手が湧いた五月晴れの日であった。

### ■ 東日本大震災のためのミサ ----- 5月10日（日）9：00 -----

「震災に対して気持ちが風化してきていませんか」——。  
そんな思いを抱いた青年たちの呼びかけで、「東日本大震災のためのミサ」が青山教会の主日ミサに合わせて、菊地司教様と坂本神父様（青山教会主任、教区青年担当）の共同司式で捧げられた。

司教様は説教で、これまでの海外支援の経験からも、災害や紛争に巻き込まれた方々に、私たちは忘れていないのだということを示していくことは大切なことであると指摘、この企画を評価された。ミサ後、参加された青山教会の信徒の方が、「若い人がいっぱいいるって、いいねえ」と笑顔で話していた。



### ■ 聖霊降臨の主日・茶話会 ----- 5月24日（日） -----

ルルド前で、ロザリオの祈りを終えた人たちが聖堂に移動。赤い祭服のラーウル神父様が祭壇に献香する香りが漂い、ミサが始まった。神父様は「聖霊が降る現象を考えるのではなく、それはどういう意味があるのかを考えることが大切」とお話を始められた。「福音朗読（ヨハネ 15・26-27、16・12-15）の“真理の霊”はイエスに置き換えると分かりやすい。教会は聖霊の導きについていく人たちの集まりで、その導きとは“互いに愛しあいなさい”、ということである。聖霊の導きによって歩みましょう」と話された後、復活節最後の日に因み、会衆に洗礼の約束の更新を促し、聖水を振り掛けられた。

